

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（企画・引率者用）

平成 27 年 10 月 13 日

所属・職名：教育文化学部 人間文化講座 ・教授

氏名：Emma Morita

研修期間：平成 27 年 9 月 7 日～平成 27 年 9 月 23 日

研修先：英文 County Library “Petre Dulfu”Japanese language&culture club

：和文 県立図書館 “ペトレ・ドゥルフ”日本語・日本文化クラブ

○研修成果

第 2 回 “Japan – Premodern, Modern and Contemporary” 日本語・日本文化シンポジウムでの発表について

基調講演者は京都大学大学院教授が招待され、また日本の大学からも多くの参加者を集めた国際シンポジウムで発表できる機会を調整したことは、学生たちの今後のキャリア・アップを考えると教育的効果がたいへん高かったように思います。参考までにシンポジウムのプログラムを添付しています。特に学生レベルの発表者は、大阪大学・京都大学・一橋大学・法政大学からの大学院生によるもので、学部生での発表は秋田大学だけでしたが、主催者からリアルタイムで送られてきた報告は大変ポジティブなものでした。学生の発表テーマが参加者の注意を引く興味深いものだったので、多くの質問があり、それらに対して学生は的確に英語でも応答ができていたというフィードバックがありました。将来日本語教師を視野に入れている学生にとっては、非常に有益な体験ができた企画であったと思います。また、ブカレスト滞在中に、日本大使館を表敬訪問し、文化担当セクションの責任者より、1 時間、日本語・日本文化を広めるための大使館が行う支援活動とルーマニアの現状と方策について、説明を受けました。グローバル社会のその最前線で、日本語・日本文化を広める上で日本大使館が果たす役割とどのような視点で活動しているかについて、普段知ることができない機会を与えられた企画であったと思います。そして、最も時間を費やしたバヤ・マレでは、学生たちが準備していた講義と習字・折り紙のデモンストレーションを行い、また、ルーマニア側からも文化紹介が行われました。その他にも、小学校から高校の英語教育事情を知る目的で、授業参観できたことは、日本の英語教育の問題点を知る上で必要不可欠となる、比較するための視点を与えられたと思います。さまざまな年齢層が参加した相互交流の過程を通して、ルーマニア人のコミュニケーション能力の高さと、日本人との違いについて、学生たちは気づいたことも大きな成果であったと思います。ことばができるかできないかというレベルの問題ではなく、自分の興味とその思いを相手に伝えようとする姿勢の違いが、コミュニケーション能力に関係することが理解できたことは、今後、彼女たちが社会人になってから、大きな教育効果をあげるものと期待しています。

○研修全般にわたる感想

今回の研修は、引率しない前提で企画したため、特に安全面では最善の策をとり、移動は必ずルーマニア人が引率するように調整しました。特に空港、到着駅でも必ず学生たちをピックアップできる体制を取りました。また研修内容については、事前に研修先と調整し、十分に準備させ、実際にルーマニアに行ってから、ほぼ2日に1回は、それぞれの企画ごとに依頼した担当者（国際シンポジウム企画者の Ciubancan 先生・日本大使館・Farkas 先生）からリアルタイムで情報が送られて来ました。そういう意味では、引率はしませんでしたでしたが完全にコントロールできた質の高い海外研修が実施できたように思います。学生たちの帰国報告書を読むと分かるように、日本文化を外国で紹介する場面に直面して初めて、自国の文化に対する知識不足に気づくことができ、企画する段階で意図した効果が、現実には得られたと思われます。今後は、今回の経験をもとにして、どのような知識を補っていくべきか、どのような問題意識を継続していくべきか、といった様々な観点を、研修後のフィードバックを通して伝えたいと考えています。